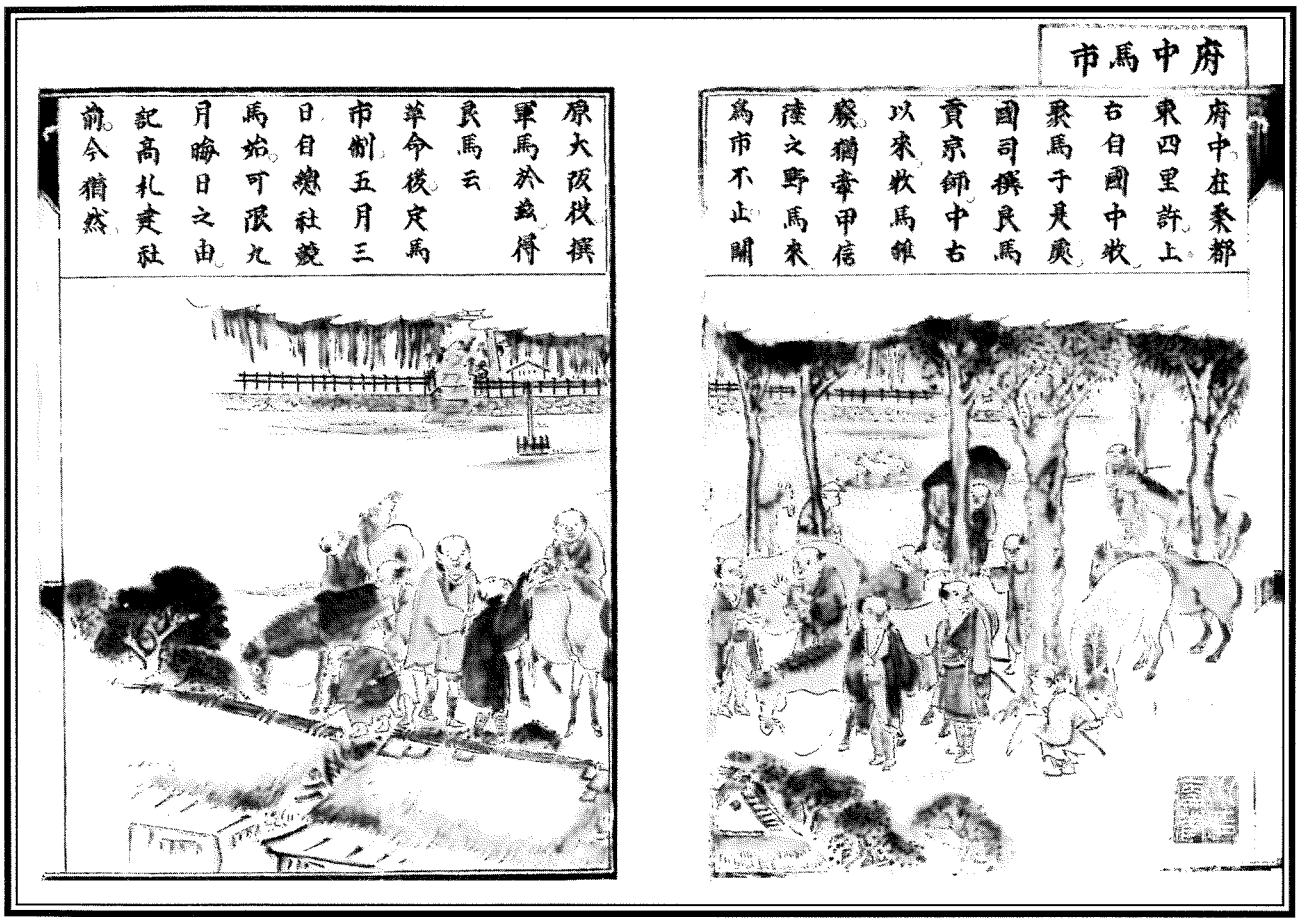
府中市誕生50周年
50th anniversary
SINCE 1954

あるむぜお69

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO.69　2004年9月20日



桑都日記より府中馬市（国立公文書館所蔵）

目次

1-2 武蔵国のなかの「くらやみ祭」 ②競馬と馬市
3 展示会への招待
武蔵府中「くらやみ祭」
4-5 ノート 稲荷神社幟旗の復活
6 民具発見 ⑥奇妙なる稲荷の縁
7 最近の発掘調査
金銅製の鈴が出土
8 たまRIVER WARS ⑥神からのメッセージ

くらやみ祭

府中市宮町にある武蔵総社・大国魂神社（六所宮）の例大祭。毎年4月30日の品川沖での潮汲み神事に始まり、5月3日・4日の競馬、囃子・万灯・山車の競演と続く。5日夕刻がクライマックスとなる神輿渡御で、6張の太鼓に率いられた8基の神輿が御旅所に入る。神輿は翌早朝に神社に還る。夜中の神輿渡御が特色で、古代武蔵国府の祭の伝統を伝えている可能性が高い。

郷土の森博物館では、10月10日から11月23日、特別展「武蔵府中 くらやみ祭」を開催予定

表紙：武蔵国のなかの「くらやみ祭」②競馬と馬市

小野一之

今も続けられている「くらやみ祭」の重要な行事のひとつに5月3日夜の競馬式があります。六所宮（大国魂神社）参道のケヤキ並木の脇を、騎手を乗せた4頭の馬が3往復疾走する神事です。5日の神輿渡御のクライマックスへ向けて盛り上がっていく重要なステップで、同じ日の囃子の競演とともに、多くの見物人があります。古くは、5日の夜と同じく、街の灯火を消して行われる秘儀だったようで、担当した神人が落馬でもしようものなら、謝罪と罰金が科される決まりもあったようです。

かつてはこの競馬式のある5月3日以降、9月晦日までの期間、神社の前では馬市が立ったと言われています。府中の馬市として知られ、歴史は古く、武蔵国内の牧の馬がこの時に集まったとされています。競馬の儀式は、国司が馬の品定めをしたことが起源だともいいます。

その馬市の様子を描いたものに、天保4年(1833)の『桑都日記（続編図解)』があります（表紙)。街道に面した広場に黒馬・白馬が10頭近くたむろし、男の手の仕草などから見ると、さかんに商談が行われている模様です。背景には境内の杜を画する石垣が見えています。鳥居の前に立っている木札は、『江戸名所図会』で紹介され、今も大国魂神社の宝物殿に残されている江戸時代初め慶長年間の「馬市の制札」でしょうか。絵の上の文面を読むと、むかし武蔵国中の牧から馬が集められ、国司が良馬を選んで朝廷に貢納したこと、こうした制度が廃れた後も甲信地方の野馬が集められ市が止まなかったこと、関ヶ原合戦や大阪の陣の時の軍馬もこの馬市で得たものであることなどが紹介され、制札の内容にも触れられています。こうした府中の馬市は享保年間（1716～36）まで続き、その後は江戸の浅草と麻布の2箇所に引き継がれたという事情は『江戸名所図会』に書かれていることです。

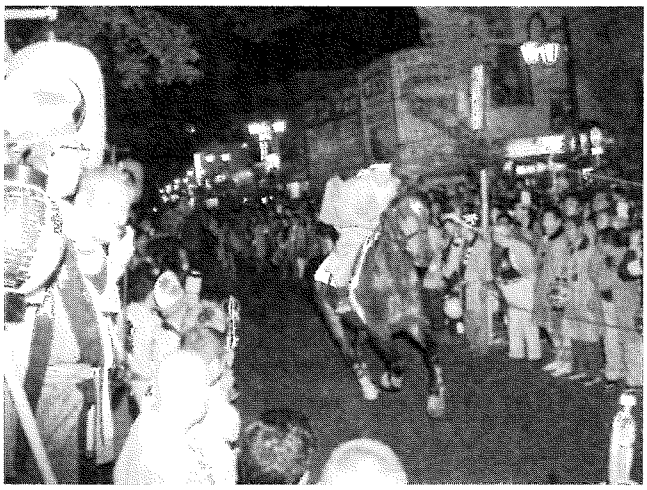
こうした競馬式と馬市をめぐって、今回も2つの問題を設定しました。1つめは、どうして「くらやみ祭」に競馬の儀式が加わっているのかです。2つめになぜ祭礼の当日に馬の市が立つのか、です。

競馬式が、国司による牧の馬の選定・点検に端を発することは、神社の伝承や猿渡容盛・盛厚ら歴代の神主の考察に示されています。ところが、一般的に神事としての競馬は神意を占う民俗行事であるとされています。しかも、平安時代以来の宮廷行事としては、今日に続く京都の上賀茂神社の競馬がそうであるように、5月5日の端午の節供と関わりの深いものです。一方、各地の牧から朝廷に馬を貢上する日程が平安時代には定められていて、小野牧（国府の近くにあったとされる）や秩父牧などの武蔵国の主要な牧（勅旨牧）の場合、8月となっていました。祭礼のある5月とは少しずれます。ということは、競馬式は馬の貢上儀礼そのものではなく、5月の祭礼にわざわざ合わせて行われた神事か、あるいは祭の原型が端午の日の競馬神事であったのではないか、と考えることもできそうです。

もし前者であるとすると、武蔵国の重要な政務の1つである馬の貢上を予祝（模擬的な儀式を先にして祈念する民俗行事）として行う神事と言えるかもわかりません。前回考えた、「くらやみ祭」になぜ御田植え祭が含まれていたのか、という問題と同様、この祭の国府の祭としての政治性を示していることになります。また、後者のように見れば、国府の祭がなぜ端午の節供の日なのか、を考えるヒントにもなりそうですが、これ以上の想像は控えておきましょう。

2つめの問題は、もっと広く考えれば、府中の馬市に限らず、一般的に祭礼と市とが密接な関係にあるという点に及んできます。実は「くらやみ祭」に相当する府中の祭礼の一番古い記録に「市場之祭文」があります。神前で唱える文が祭文ですが、市を立てることは神の図りごとだと述べた後、「武州六所大明神も五月ゑの市を立たまふ」、つまり、六所宮の神が5月の祭礼に市を立てたという文面があります。市場ができ、そこで商取引が行われること自体が、人間ではなく神のなせる業だという古い思想を伝えながら、一方では、商工業に携わる多くの都市民が室町時代の府中の祭礼を支えていた状況を示していると思います。

時代は移り、祭の様相も変わり、その時の市の地域における経済的な役割は小さくなりましたが、今なお祭には、○○市や屋台の並びが欠かせません。人が集まるから売り手も来るというシステム以上に、何か祭と市との宗教的な関係が浮かび上がってきます。



「くらやみ祭」の競馬式（2002年5月3日）

展示会案内

府中市制施行50周年記念特別展

武蔵府中 くらやみ祭

毎年5月5日を中心に、盛大に繰り広げられる「くらやみ祭」。その歴史をたどりながら、祭を支える莫大なエネルギーの源泉を探ります。

10月10日（日）～11月23日（祝）

LA MATSOURI DE ROKSA-MIA : PROCESSION NOCTURNE DANS LA FORÊT.

幕末外国人の見た「くらやみ祭」

神にお供えをして祈願をすることを「祀る」といい、その儀式のことを「祭」といいました。もともとは同じ神を信仰する限られた人による秘められた儀式だったはずですが、やがて祭には華やかな賑やかしの行事が付け加えられ、年に1度の大きな楽しみのイベントになっていきます。そうしたなかで、祭を支える大掛かりな運営組織が作られ、たくさんの見物人もやってくるようになります。祭は見られることによって、より華やかに洗練されたものに変わっていったということができるでしょう。これを「祭」から「祭礼」への展開と呼ぶことができます。

「くらやみ祭」は、武蔵国を統治するための武蔵国府主催の「国府祭」が起源だと思われますが、室町時代までには、都市の成熟を背景に商工業者が参画する祭礼に展開していった様子が古文書からも窺えます。江戸時代にも宿場町の繁栄や江戸近郊という地の利から、多くの見物客にも恵まれました。明治には、この祭礼を支える組織が、府中や多摩地域を越える広範な地域に形成され、かつての武蔵国全体の祭としての威容を今に伝えています。

伝統ある祭は、各時代の転換期を乗り切り、変容を重ねつつ、さらなる発展をめざしているように感じられます。そこには地域の人たちの祭に対する不断のエネルギーがあるからです。（小野一之）

展示構成：くらやみ祭の次第／くらやみ祭の歴史（武蔵国府と総社六所宮／中世武蔵府中の祭礼／宿場町とくらやみ祭／江戸と小江戸の祭／名所になったくらやみ祭）／くらやみ祭を支える人々／思い出のなかのくらやみ祭

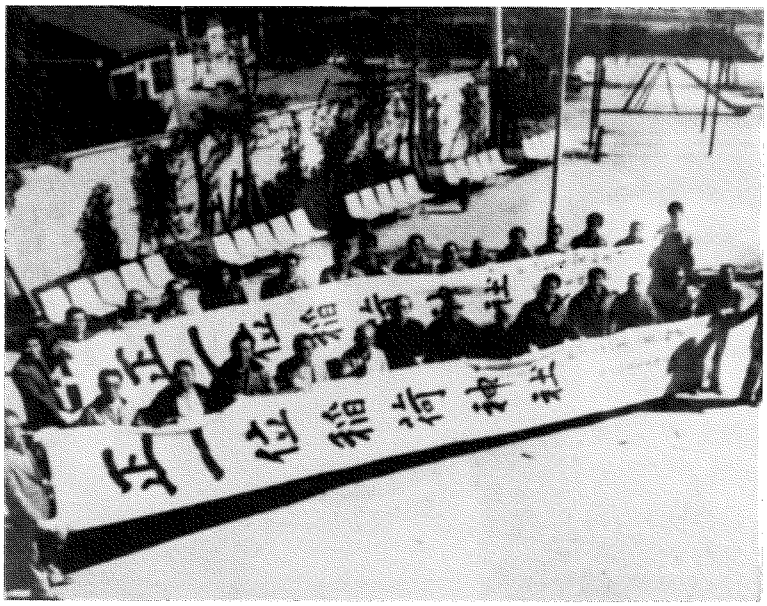
協力：大国魂神社・大国魂神社奉賛会・府中市観光協会

期間中の「郷の市」では、現役の山車の展示・府中囃子の演奏・大太鼓の巡行・大道芸などがあります。

NOTE

稲荷神社幟旗の復活

佐藤智敬



1976年頃、是政1丁目公会堂前にて、幟旗寄進時の写真。もはやここに写っている半数が故人だという。

初午と稲荷神社

毎年2月のはじめての午の日は、「初午」といわれ、全国各地でお稲荷さんのお祭りが行われます。集落で祀る鎮守から家に鎮座する小祠まで、赤、白、五色の布や紙でできた幟に「稲荷神社」「正一位稲荷大明神」などと記し、社殿には稲荷神社の祭神（倉稲魂神）や眷属である狐に油揚や目刺、酒などを供え、おまつりする行事です。

稲荷の本家とされ、正月の初詣客数のトップテンに常にランキングされる名社、京都府の伏見稲荷大社でもこの日は盛大に祭（初午祭。例大祭は4月）が行われ、大勢の人でにぎわっています。お稲荷さんは主に近世期に大流行し、全国各地に広まっています。五穀豊穣、商売繁盛その他もろもろのご利益があるとされ、現在でも多くの稲荷神社には参詣客が絶えません。

府中市内にもたくさんの稲荷神社があります。集落の鎮守としても、家々の屋敷神としても多く分布し、その数は400をこえます。

2004年の初午の日は新暦2月9日でした。府中市の天気は快晴。市内各所で初午祭が行われました。その中で、府中市是政1丁目にある稲荷神社では、ひとつの歴史的事件がありました。約40年ぶりに巨大幟旗が掲揚されたのです。

禰宜村稲荷神社とその祭祀

是政1丁目公会堂に程近い路地にひっそりとその稲荷神社は鎮座しています。神社の位置する場所はかつて「禰宜村」と呼ばれていました。明治23年（1890）、府中駅（後の府中町）から多磨村に編入された地域です。この場所は織田家（地元では「オダサマ」と今でも呼ばれている）の領地でした。この家は六所宮（現在の大国魂神社）の禰宜職（神職のひとつ）をつとめていました。近世期に六所宮宮司家の分家が跡を継いだため、宮司家と同じ猿渡家を名乗り、宮司宅の北隣に住むことになったことから「北猿渡」と通称されている家です。創建年代は不詳ですが、稲荷神社自体、猿渡（織田）家の屋敷神であったといいます。しかし現在の宮町に居を移した後も猿渡家の鬼門（北東・縁起の悪い方角とされている）を避けるためにそのまま残されたといい、現在、通常の祭祀は旧禰宜村の人々10数軒で行われるようになっています。

昔からの祭祀方法がどのようなものであるかは分かりませんが、明治21年2月初午に藤原（猿渡）盛雅の書による、「正一位稲荷神社」と記された非常に大きな幟がつくられました。そしてそれは祭礼時にはきまって掲げられていたようです。この地区では、市内では珍しく、1月19日に公会堂において「正一位稲荷大明神」と記した掛軸をかかげ、「稲荷講」を行っています。その折に稲荷講年間4軒ずつくじ引きで「年番」と呼ばれるその年の祭祀者が決められます。初午の行事をとりしきるのはこの年番になります。

他に御嶽講や大山講などもありましたが今は行われておらず、この地区で行う行事は稲荷講のみとなっています。今日の稲荷講として初午の行事も自治会の親睦

あるいはレクリエーションといった意味合いの強いものとなっているのかもしれません。

幟旗の焼失と復活

今から40年ほど前、事件が起こります。附近で火災が起こった際、幟を立てるための棹が焼失してしまったのです。それ以降、棹は作られることがなく、幟は府中市郷土の森博物館の前身、府中市立郷土館に棹の復活の日まで預けられることになりました。その際、旧禰宜村の人々によって撮影されたのが左の写真です。大人が15、6人ほど並んで撮影することができるのですから、いかにその幟旗が大きいかがわかります。

その後、氏子たちの高齢化、昭和40年に新調した小さめの幟の存在などにより、もはや大きな幟の復活は叶わないものと思われていました。仮に復活したとしてもこれだけの幟を支える棹を毎回立てるだけの体力、人力にも心配がありました。しかし、今年95歳になる北猿渡家の猿渡道子さんは「もう一度あの大きな幟がはためくのを見たい」と、幟の復活を常に願っていました。そしてついに今年になってその機会が訪れました。これらの問題を解決する糸口がみつかったのです。

それは本宿の稲荷神社で導入された、折りたたみ式の棹の存在でした。長い棒に幟をとりつけ、棹を起こしてから垂直に立てるのではなく、自転車の空気入れから空気を注入することで上へと伸びていく仕組みです。これによりどんな高さでも楽に幟を立てることが可能になったのです。是政の稲荷神社でもこれを導入したのです。

初午当日は大きな幟が約40年ぶりにはためいていました。各家の稲荷（屋敷神）を祀ったあと、皆で稲荷神社に参集し、11時頃からは大国魂神社の禰宜が来て、儀式が行われました。社殿には、油揚、イワシの目刺、豆腐、赤飯などが供物として供えられ、猿渡道子さんをはじめとして、北猿渡家ゆかりの皆さん、旧禰宜村の人々の順で礼拝しました。そして公会堂に場所を移し、直会が行われました。今年は40年ぶりに幟が復活したことを聞いた有線放送の取材もあり、にぎやかな初午となりました。

復活の創造

以上のことは、単なる「昔の姿の復活」とは違うように思います。過去を参考にした、創造的な行為のように感じるのです。脈々と受け継がれてきた祭礼の維持は深刻な問題です。ある場所では、たった一本の小さな幟旗を立てるのに必要な人員が揃わないため、それを立てることを断念して久しいと聞きました。またある場所では、神輿の担ぎ手が揃わないため、旧暦の祭礼日を土日に変更し、役所の職員や小中学校の先生に加勢を頼んだり、神輿をトラックにのせて巡幸するといいます。こうしたことは、過疎の土地でよく見られるようになっています。これらの現象は、伝統を維持できず、改変を余儀なくされたマイナスの事例として紹介されることがあります。しかしさまざまな行事が時代の要請にしたがって変化していくことは必然です。むしろ限られた人々、状況でいかに自分たちの行事を伝統として創造しようとしてきたかを知る手がかりであるといえるでしょう。その意味で、是政1丁目の稲荷神社の幟旗復活は旧禰宜村の結束、そして40年ほど前の歴史を下地にして、現状に沿った選択をした創造的な例と言えるのではないでしょうか。

2004年初午の日、約40年ぶりに復活した幟旗。後部の二階建て建造物よりはるかに高く偉容を誇る。

永年続いているとされる行事でも、時代時代によって栄枯盛衰があります。是政の稲荷神社の幟旗の復活は傍目から見れば微細なことかもしれませんが、府中市の歴史の一側面として、そして近代の稲荷祭祀の理解のためにも重要な意味を持っているのです。

ミニ展「府中のお稲荷さん」のご案内

是政のお稲荷さんの初午の様子も含め、ミニ展31「府中のお稲荷さん」を平成17年1月16日（日）まで本館常設展示室ミニ展コーナーにて開催中です。幟、小祠、額など、さまざまな府中のお稲荷さんを紹介しています。ぜひお越し下さい。

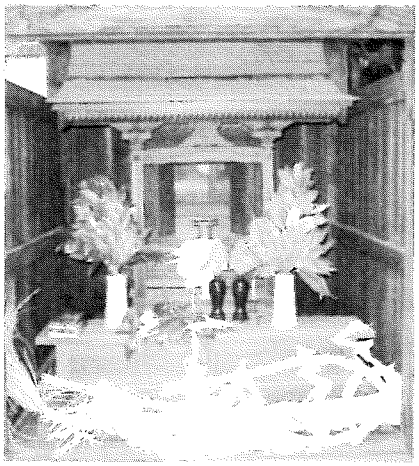
民具発見

佐藤智敬

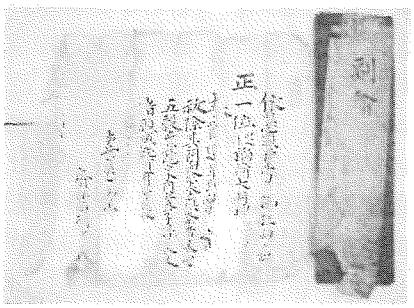
第六回　奇妙なる稲荷の縁

この連載のタイトルは「民具発見」となっています。資料の価値を自分なりにみつけたことを「発見」と言っているためです。しかし、別の視点で見れば発見の機会そのものは、向こうからやってくるともいえます。「こんなものがあるんだけど」といった連絡など、どんな資料でも何らかの縁から博物館に身をよせることになるのですから…。今回はそこに注目し、信仰に関するもので、しかもなんとも不思議な縁から集まったものについて紹介しようと思います。

民俗資料にはしばしば信仰に関する道具類があります。以前、モノはゴミにも神にもなりうる、と書きました。しかし信仰対象に近い、と分類されるモノは確実に存在します。お守り、お札、祭具、神仏の像、木魚、掛軸、提灯など、何らかの祭祀、供養に使用したものに違いないと思われるものです。それらはたいてい宗教の別なく、新調、祭祀する人の不在などの理由から手放され、博物館に来ることが多く、かつて信仰のために使用した道具類、という位置づけがなされています。以下の例もそうでした。



押立町４丁目の屋敷稲荷祠（当時）



芝間稲荷神社勧請証書

今年の５月初旬のことでした。「転居することになり家の屋敷神ごと取り壊すことになった。ついては幟や祠などを博物館で引き取ってはもらえまいか」という旨の連絡がありました。押立町にあるその家で、その前に住んでいた人が、少なくとも近世から祀っていた稲荷神社をそのまま守ってきたものだといいます。家自体の転居はもうすんでおり６月には壊してしまうので、それまでに必要であれば持って行って欲しい、とのことでした。そこで、５月21日、下見に行ってみると、なかなか立派なものでした。収蔵資料に屋敷神の祠はなかったこともあり、是非寄贈していただこう、ということになりました。

その後、何日から解体作業がはじまるのか確認しようと、25日の朝、通勤途中に現地を訪れてみました。すると偶然、解体業者の方が来ていて、しかも昨日から家の解体工事をはじめている（！）というのです。しかも祠も魂を抜いたから、昨日のうちに解体、焼却する予定だったけど風が強かったため燃やさないでおいただけなので、今日中に燃やしてしまおうと思っている（!!）、といいます。これは一大事。とにかく祠の解体、焼却は待ってもらって朝一番で車を手配しました。そして業者さんに祠の周囲を壊してもらい、社殿とその付属品をとりだし車に積み込みました。ぎりぎりのところで焼却をまぬがれ、なんとか博物館に搬入することができたのです。

奇異なことは続くものです。まさにその日の午後、芝間稲荷神社（南町）の氏子会の方が来館されました。そして、「社殿を整理していたら見つかったので、どういうものだか調べて欲しい」と、「副翰」（副えられた手紙）と記された木箱を持参されました。なんとその中には、嘉永２年(1849)に妻恋御社（文京区湯島鎮座の妻恋神社。江戸時代後期に信仰が流行し、妻恋稲荷ともいわれる）から神社を勧請（神の魂を分けること）した際に発行された文書が入っていたのです。神名を「正一位芝間稲荷大明神　武州府中本町ノ字」とし、永年、五穀豊穣、家内安全、子孫長久、諸願成就等のご利益があると記されていました。偶然にもこの日には博物館に市内の稲荷関係の資料が２箇所から集まることとなったのです。

その後、押立町の稲荷には、幟、狐像、魂抜きをした御神体、証書などが、一時保管されていた国立市の谷保天満宮より合流しました。芝間稲荷の文書も、損傷がはげしく、御神体ではないので博物館への寄託が望ましいだろう、という説明を８月中旬に開かれた氏子会総会でしたところ、快く皆さんに了承いただきました。かくして、ふたつの稲荷に関する資料は博物館で保存されることとなりました。

一日のうちにたて続けに起こった稲荷の資料に関する縁。お稲荷さんが私を呼んだのでしょうか？これを理屈で説明することは叶いません。奇妙な縁ですが、現実は博物館の資料に稲荷に関係するものが二組追加されたにすぎません。稲荷どころか、信仰に関するモノに限らず、農具、食器などあらゆるものについていえますが、それがどのようなものかを調べ、整理し、説明できるようにすることこそ博物館では求められます。稲荷については、これらの資料を、小社の信仰史や、お稲荷さんを祀ることが当たり前であった府中の生活の一側面を知るための手がかりとして活用することこそが求められます。詳しい調査はまだまだこれからです。

……最近の私はというと、夜中無性にいなり寿司が食べたくなったりはしていません。今のところは……。

最近の発掘調査

金銅製の鈴が出土

宮西町一丁目　府中市教育委員会　西野　善勝

出土した金銅製の鈴

７月に実施した遺跡発掘調査で古代の鈴が発見されました。出土した鈴は金銅製で、直径が約 2.6cm の球形。表面の一部には金色の輝きが鮮やかに残っていました。上部には小さな穴が空いていますが、これは小さなツマミが取り付けられていた痕跡でしょう。下部は破損していますが、縦方向に開いた細長い穴の端が残っています。中に入れた玉（丸）はありませんでした。

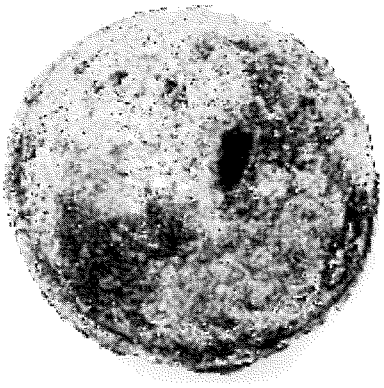
この銅鈴は平安時代（9 世紀）の竪穴建物跡から出土していますので、同時代のものと考えてよいでしょう。

出土地は大国魂神社から北へ約 100m の地点です。けやき並木の西側、称名寺の南側です。大国魂神社の東側一帯は古代武蔵国の国府の中心施設である国庁の所在地で、神社の北側では奈良・平安時代の竪穴建物跡などの遺構が多数確認されています。つまり、銅鈴の出土地点は国府の街の中心部といってよいでしょう。

銅鈴の出土は市内では６例目です。他の５例の出土地は寿町・片町・分梅町・本町・府中町です。寿町・本町・府中町は国庁を中心とした地域、片町と分梅町は古代の国道である東山道武蔵路の通る地域です。いずれも広大な武蔵国府関連遺跡のなかでは遺構の密集する地域といえます。

ところで日本列島では、縄文時代の遺跡で土製の鈴と考えられるものが出土しています。金属製の鈴は朝鮮半島から５世紀頃伝えられました。鈴は本来楽器ですが、装飾にも用いられました。それはまた呪術的性格も持っています。古墳時代には、銅鏡に付けられたり、また服飾品として帯飾りに付けられたものもありました。動物に付けられた場合もあり、特に馬は豊富に鈴を付けて、飾り立てられました。呪術的性格は、現在でも巫女の舞に用いられるものや神社の拝殿正面に吊り下げられた大鈴などにみることができます。

国府跡で出土する鈴がどのような性格を持っていたのかを推測する手掛かりはありませんが、鈴の音と共に古代の人々の生きていた府中の姿が浮かんできそうです。



上方から見た鈴

たま RIVER WARS

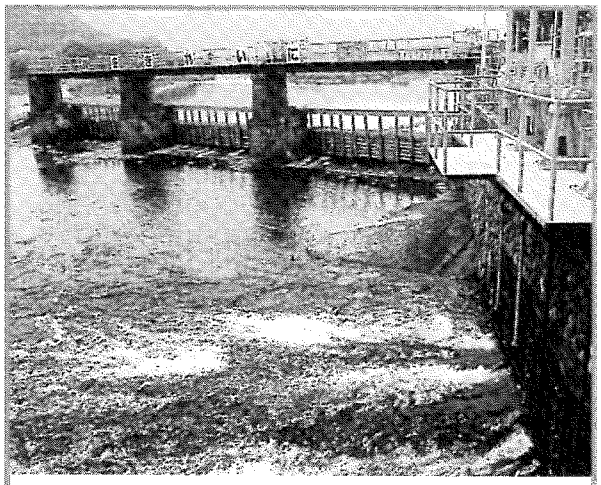
⑥神からのメッセージ

中村武史

つい最近までボスザルと言えば、群れを統率するリーダー格のサルを呼称していたが、その後の研究では、単に群れの所属年数が最も長いサルにすぎなく、ケンカの仲裁や群れを守るボス的な行動を伴わないことがわかったそうである。今年になってボスザルと言う名称を廃止する動物園もでてきているようだ……が、しかし今まさに好奇心旺盛な4人の中学生の目前に出現したサルは、ボスと呼ぶ以外には名称が思いつかないくらい確固たる勇姿で、魚道の獲物を探している様子である。叫んだエノキンにも動揺はあったが、ダムの上の3人には比べようも無いほどの衝撃だった。当然運動神経に及ぼす影響は計り知れなく、網を放つタイミングはお世辞にも誉められたものではなかった。余裕で網をかわしたビッグ-ボスは川岸から林の奥へと身を隠してしまったのである。「お～い、降りて来いよ！」ダムの下から叫ぶエノキンの姿が見えた。半ば放心状態の3人がエノキンと合流した時点で、まるで何事もなかったかのごとく上流域独特の川音が木霊していた。

「見たな？」エノキンの問いかけに3人は頷く。「源流神の言ったことが証明されたわけだ。大ザルは実在したんだ、確かに」セイコがすかさず、「でもアレをどうやって連れ戻すのよ？私たちでは到底無理なことだよ～」タウエも割って、「そうだそうだ、エノキン、これからどうするんだ？俺たちの敵う相手じゃないし……俺たちがしなくちゃならない事でもないじゃん！」…でもきっとエノキンは反論するだろうな…ハニーは心の中でそうつぶやいた。ずっと今も抱えているひとつの疑惑が彼女の思考を支配しているのだ。案の定、「まぁ、そう言うな、よく考えてみろよ。確かに今は打つ手が見えないかもしれないさ、でもここまで来たんだ、あと一歩が遠いだけで確実に俺たちは前進している。これから中流域に入っていくし、ある程度は俺たちも動きやすくなるんだから逆に有利なはずだぜ」多摩川に限らず、大方の川は山岳地帯にその流れの源を発し、傾斜の急な流れの速い上流域と呼ばれるエリアは両サイドを山の斜面で囲まれた谷底を流れる。やがて山を下り終わると流れは緩やかに変わり、両岸には河原が出現する。上流はむしろサルたちのホームであったが、これからは山とは勝手が違うアウェーとなるのだ。エノキンが言うこともあながち気休めとも思えなかった。「とにかく乗りかかった…いやもう乗っている船だ、みんな多摩川好きなんだろう？この川を守ろうよ！……ね」最後はこの言葉に全員が納得した次第である。

「ヤツが身を隠した方をちょっと探ってみようか、何か分るかも知れないよ」言い終わる前にエノキンは林に突進していた。今度はあとの3人も続いて走った。また エノキンとはぐれるわけにはいかないという防衛本能からかもしれない。「何か怖いよ～」セイコの病気が始まった。うっそうと茂った木々の緑陰をキョロキョロと警戒しながら進んだところで、「おい！樹皮に何か書いてあるぞ！」タウエの絶叫である。よく見ると、何かで引っ掻いて書き記したのだろう、かなり読みにくい文字だったがそれでもはっきりとメッセージが残されていた。“ハムラノセキニチュウイセヨ”「源流神だ！羽村だ、羽村の堰で何かが起こるんだよ、きっと」さすがエノキン察しが早い。「そうは言ってもまだ25km以上も先だぞ、御岳渓谷を越えた先の多摩川中流域に差し掛かる場所だ」タウエの妙に説明っぽいセリフが後に続いた。「源流神のメッセージを信じるなら、少なくともその間は何も起こらないってことじゃない？一気に上流を下れるわ」的を得たハニーの意見。そして エノキンが考え込みがちに口を開いた。「いずれにしても羽村の堰といえば……玉川上水羽村取水堰……江戸時代から伝わる土木技術の投渡堰が今も生き、技術の伝承が行われているのが特徴である。従来の固定された堰ではなく、台風や大雨で洪水が起きそうな時、堰を人の手によって取り払い水と一緒に流してしまうという合理的なものだ。ここで集められた水は、第一水門から取水され、一部は多摩川に戻されるが、残りは第二水門で水量を調節して玉川上水に流される。玉川上水は約350年前、当時深刻な水不足に悩まされていた江戸を潤した生活用水路であり、上流部は今でも現役の導水路として活躍する……まてよ？」ふと エノキンの説明が止まった。「おい、もしかしたら……いやそんなはずは……アイツらはこの玉川上水に何か仕掛けようとしているんじゃないのか？こいつは大変だぞ！」ハニーにとってもはや条件反射になりつつあると言っていい エノキンの言動に対する疑惑はこの場でも生じていた……“ずいぶんと芝居がかったセリフだわ”。



羽村の堰
『多摩川を歩く』（2001年　JTB）より

源流部の一の瀬に始まり、丹波、惣岳、鳩の巣と続いた多摩川上流域の渓谷も、いよいよこの御岳渓谷をもって最終となる。4人を乗せたイカダは今、順調に風を切って走っていた。水の流れに便乗して一気に羽村の堰を目指そうとしているのだが……ハニーの言葉を借りるなら、少なくともここでは何も起こらないはずだった……否、全員が突然の気配に右を向くと、何やら巨大な影が各々の視界に覆い被さってきたのである。

つづく

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.69　発行日 2004/9/20
編集・発行（財）府中文化振興財団　府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32　TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/